

「受験競争」論再考

森 永 智 子

1. 問題の所在と調査の概要

本稿は、「高校受験をする全ての中学生が、受験競争に巻き込まれていると果たして言えるのだろうか」「高校受験をひかえた全ての中学生が、いわゆる受験競争論の論理に従って行動していると言えるだろうか」という疑問から端を発している。私は、彼らのする勉強や受験が、学歴社会ひいては受験競争の文脈でばかり説明されることへの疑問から、一つの調査を試みた¹⁾。その調査によって、対象者たちの勉強観と受験観を、受験競争論の文脈にとらわれることなく、彼らの日常生活の中で捉えようとした。

まず、第一の調査は、H 県 H 学区において、あやか、じゅんじ、せいこ、たけし、ゆか、れいな（仮名）という 6 名²⁾の公立中学生（女 4 人、男 2 人）に対して、1999 年度と 2000 年度にそれぞれ継続的に一年間ないし二年間にわたり実施した聞き取り調査³⁾である。インタビュー調査では、対象者たちの日常感覚を描きだすために、多くは一問一答形式をとらず、会話の流れの中にある彼らの受験や勉強への語りを記述した。そうすることで、彼らの日常における受験や勉強に対する率直な思いが浮き彫りになると考えたからである。そこから捉えた対象者の勉強観や受験観は、彼らの日常生活の中で、どのように位置付けられるのかも分かる。

第二の調査は、同学区の H 市立 K 中学校の中学二年生 70 名と三年生 63 名を対象とした質問紙調査である。これは、インタビュー調査を補うべく、2000 年 10 月に実施したものである。

第三の調査は、インタビュー調査の対象となった 6 人の中学生の親と、インフォーマントの 6 人以外の中学生を子に持つ親へのインタビューである。中学教師へのインタビューも含む。

調査から得られた知見とは、①彼らの日常生活世界においては、勉強と受験との間に連続性が認められないということである。対象者の勉強には継続性がな

い。テスト直前になると、各テストをしのぐためだけの場当たり的な勉強が繰り返され、その勉強は入試へ向けて継続的に蓄積されない。また、②そうした彼らの日常の諸相からも、彼らの日常における意識は、必ずしも受験に向けて構造化されていないということがいえよう。③彼らは受験を前にしても、受験体制に必ずしも包絡された日常を送るわけではなく、自らの楽しみを犠牲にはしない。さらに、彼らの進路選択プロセスを追ってみると④彼らの進路選択意識が、雰囲気がい、あこがれの制服が着られる、将来の夢につながる、というような受験競争論で言われるような価値観とは異なる方向性をもっていることが分かる。彼らの進路選択意識は、自己の成績に照準させた高校ランクに規定されるという一元的な説明ではすくいきれないのである。また彼らは、⑤親や教師の進路選択基準をも自らの選択方法の中へ納得の行く形で取り込んでいく。

以下の議論は、これらの調査から得られた知見の上に成り立つものである。

さて受験競争論とはどのような理論として確立されているだろうか。最も洗練された竹内による受験競争の説明をたよりに、受験競争論の構造をまとめる。また、受験競争論においては、受験生はどのように描かれるのかを記しておく。具体的には、受験生の捉え方、さらには、受験生の勉強に対する意識、受験生の進路選択方法と進路選択意識の捉え方について再確認する。

本稿の目的は、調査対象となった受験生 6 人から得られる受験観や勉強観が、受験競争論の文脈内で捉えられるのかどうかを考えることである。そして、もしうまく捉えられないならば、また彼らに見る受験生像が受験競争論の描いた受験生像に適合しないならば、これまで述べた調査結果を拠り所にして受験競争論に再検討を加えることにする。

2. 受験競争のメカニズム

竹内は受験競争がなぜ激化するのかという問題を提起し、受験競争激化の論理を説明した(竹内1995)。受験競争がなぜ過熱化するのかを解き明かした、最も洗練された研究者である。それまでは、受験競争論といえば、学歴の社会経済的地位達成に主眼を置いたものが主流であった。竹内はこの学歴の社会経済的地位達成に主眼を置いた学歴社会論を学歴社会Ⅰ論と呼んでいる(竹内1995)。

竹内は、「学歴社会Ⅰに照準した研究の知見は日本は学歴決定社会からほど遠く、学歴有意社会といったものでしかない」(竹内1995: 92)と述べ、学歴社会Ⅰ論からは受験競争の発生するメカニズムは説明できないとの見解を示す(竹内1995)。そこで、竹内は、学歴社会Ⅰ論から学歴の象徴的価値に照準した学歴社会Ⅱ論、受験社会論へのパースペクティブの転換を促した。そして選抜システム刻印論⁴の立場から、竹内は受験システムの自立化/自己準拠化に受験競争過熱の説明根拠を求めている(竹内1995)。

2-1. 学歴社会Ⅰ論における受験競争論

竹内以前の受験競争の説明では、天野(1984)が代表的であろう。

天野は、受験競争を日本の学歴社会の構造内のものとして捉えている。特に、学歴社会における職業構造に受験競争の原因があると説明している。

天野によれば、日本の経済復興と高度経済成長は、職業の世界に構造的な変化をもたらした。この構造的変化は産業構造変化で、最も特徴的であると天野がみるのは、管理的・事務的職業に従事するホワイトカラーと、第三次産業に働くセールスを主体とした職業人口の増大だった。この二つの社会層には、一定の一般的・知的な能力の必要性はあるが、特定化され、高度に専門化された知識・技術は必要ないという共通点があったという。そして、学歴主義との関係でとくに重要であると天野が見たのが、ホワイトカラー職業だった(天野1984: 123)。

官僚制化の進んだホワイトカラー職の組織は、職務の分化したハイアラーキカルな構造をもつ。職務を遂行するには専門分化した知識や技術が必要だが、採用に関しては、特定職務の専門的能力に応じてなされたわけではなかった。選抜・採用は、サロウが「訓練可能性」とよんだ一般的能力に応じてなされた(サロウ

1980)。採用後は、さまざまな職務を経験し、その能力を組織内で獲得して、高めながら、ハイアラーキーのなかを上昇移動する。こうしたホワイトカラー職業は「内部昇進型」キャリアパターンをもつとされる。この内部昇進型の職業キャリアは、訓練可能性をあらわす学歴と、不可分の関係にあるという。

特定の専門的知識や技術を必要としない職業分野の拡大という職業構造の変化は、教育の「普通」ないしは「教養」教育化⁵と対応的な関係にあると天野は指摘した。

ホワイトカラーに代表される専門的知識や技術を必要としない職業には、あらかじめ特定の専門的能力を獲得している必要はなくても、一定水準以上の一般的な知的能力が必要とされた。以前は、中等教育修了の学歴で、官僚制的な組織のなかでの「内部昇進型」のキャリアをスタートしていたものが、日本のように高等教育の大衆化が著しく進んだ国では、中等教育修了にかわって高等教育修了の学歴が、採用の際の基礎的な資格となるという。高学歴化が進み、一般的な知的能力をもったもののプールが、中等段階から高等段階にまで拡大すれば、企業は、訓練可能性のより大きいもの、つまり訓練コストのより少ないものから、優先的に採用していくだろうと天野はいう(天野1984: 124)。

優先的採用は、まず第一に、中等教育卒よりも高等教育卒、高等教育卒の中では短大卒より大学卒、大学卒よりは大学院卒というように、高学歴者優先の形で進行するとされる。第二に、同一学歴をもつもののうち、成績優秀者優先という形をとる。第三に、「学校歴」が重視される。

教育の大衆化の進行過程で、学校間には入学者の選抜の違いによる格差が生まれ、ハイアラーキカルな構造が形成される。ハイアラーキーが形成されると、学校は知的能力による選抜機能を果たすようになり、企業はハイアラーキーの頂点部に近い学校から順次、卒業生を採用していくのである。

企業が学歴(学校歴)によって、人々を序列化し、その上位から採用するという制度が一般化するとき、必然的な結果として、受験競争の激化が生じる。受験競争激化過程についての天野の説明は以下になる。

採用の順位が学歴により序列化されていることから、人々はその序列の上部の位置を占めるのに必要な、より高い学歴を獲得するために、上級学校への進学をめざし、進学率が上がる。進学率上昇の結果、高

学歴化が進む。高学歴化が進めば、人々はより高い成績を手に入れるために競争する。高い成績は、序列上の順位を高めると同時に、上級学校、さらには一流校への進学に重要な条件であるため、成績競争は次第に下級の学校にも広がる（天野 1984：125）。

進学率が高まり、学歴の大量生産が行われると、学校間格差が広がり、「学校歴」が重要性を増し、人々は一流校への進学をめざして激しく競争する。受験競争はやがて、特定学部への進学希望者の集中という形でも起こるようになる。

天野は、こうした競争の過程はいったん始まると、ほとんど無限に続くと言及する。学校教育システム内で上層を占める学校ほど、またその中でも一流校とされる学校ほど、多数の優秀な志願者を集め、厳しい選抜によって高い知的能力をもった学生を送り出すことができる。企業が、そうした学校教育システムの選抜機能を信頼し、高学歴・高学校歴のものから順に優先的な採用を行うと、教育システムのもつハイアラーキカルな構造は強化され、競争が激化するというのだ（天野 1984：126）。

では、なぜ、そうした職を人々は目指すのか。天野によると、学歴主義的な採用を行う大企業や官庁、ホワイトカラー職種が、人々からもっとも望ましいとされる部分を占めているからだということになる。なぜ、望ましい職業とされるのか。それは、それらの職業が、労働市場全体の中でも収入、権力、安定性などの点で、上位を占めるからだという（天野 1984：129）。

高い威信を持つ組織や職業は、労働市場全体のごく小さな部分を占めるにすぎない。しかし、天野は、この限られた「良好な雇用機会」が社会的に持つ意味は、その比率の意味するところよりもはるかに大きいとしている。それは、人々が学歴が高ければ高いほど、この限られた魅力的な組織や職種をめざして、激しく競争するからだ。さらに採用が、高学歴（高学校歴）者から優先的に行われることからその競争は、さらに高い学歴を取得するための受験競争へと広がっていく、というのが天野の説明である（天野 1984：130）。

以上は、竹内が学歴の機能的価値に主眼をおいた学歴社会Ⅰ論だとした文脈内での受験競争の説明である。竹内は、日本の受験競争の激しさは、そうした学歴社会Ⅰ論だけでは説明不能だとして、学歴社会Ⅱ論、受験社会論へのパースペクティブの転換を促す。

2-2. 竹内洋による受験競争論

学歴社会Ⅱ論とは、学歴の象徴的価値に照準したものである。竹内は、学歴社会Ⅱ論の説明を梶田の論に拠っている（竹内 1995）。

梶田は、学歴問題、ひいては受験競争を、社会的地位や収入等の面から吟味するだけでは不十分であり、人々の共有する「まなざし」の面から、そしてそれによって形成され規定される自己への「まなざし」の面からも吟味していく必要があることを指摘している（梶田 1983）。

梶田は、日本では、どの学校に進んだのか、どの学校を卒業したのか、ということが、多くの人々からの「まなざし」を規定するものになっているという意味において、学歴の心理構造を説明した。最終的に卒業した学校が、東京大学なのか、有名私立大学なのか、それとも地方の無名の大学なのか、もしくは高卒なのかといった情報に接するだけで、周囲からの「まなざし」は大きく変わってくるというのだ。それに伴い、当事者自身は、周囲の人の「まなざし」の中で価値あるものとされれば、自らをそのようなものとして見るようになるという。有名大学を卒業していることは、自他の「まなざし」の中で、人間としての基本的価値が高いことを、社会的毛並みの良いことを、つまり「貴種」であることを意味するものになるのである（梶田 1983：34）。

このように、周囲の「まなざし」の中で、ひいては自身の「まなざし」の中で、自らが価値あるものとされるためにこそ、「貴種」として自他に見られたいがためにこそ、子どもたちは有名高校、有名大学を目指す。また、親の側の学校歴信仰も、必ずしもその方が生涯賃金その他で実質的に有利になるからというようなことでなく、我が子が社会的イメージの中で、つまり人々に共有の「まなざし」のなかで「貴種」に位置付けられることを追求している、と指摘している（梶田 1983：34-35）。

生涯賃金の点で有利でなくとも、組織内での昇進が自動的に約束されているわけではなくとも、また、社会的な実力や人間性の点で問題がある場合が少なくないことが明らかになっても、人々の「まなざし」の中に「貴種」イメージが存在する以上、有名大学の在学生、卒業生であるということは、追求するに値する価値を持つと梶田は言う（梶田 1983：37）。

竹内は、こうした「まなざし」としての学歴に着目した場合、日本は学歴意識社会であると述べている。日本では「高卒だが大企業の重役になった」とか「東

大を出ていないのに、東大教授になった」といった言い方をするのは、他者による学歴への「まなざし」があるからだというのである(竹内 1995: 90)。

竹内は、こうした「まなざし」としての学歴の作用を、象徴的価値といい、学歴の象徴的価値に支配される社会を「学歴社会Ⅱ」とした。竹内は、このような象徴的価値に見る学歴社会論を、学歴社会Ⅰ論に対し学歴社会Ⅱ論とよんでいる。

竹内は、学歴社会Ⅰに加えて、学歴社会Ⅱの視点を用意した。さらに、日本社会における受験システムの自律化／自己準拠化のメカニズムへの注目を促す。「受験社会」である。「受験社会」は「学歴社会Ⅰ」＋「学歴社会Ⅱ」の従属システムであり、従属システムとしての「受験社会」が相対的に自律化し、自己準拠的構造をビルト・インしたものだという。学校ランクや偏差値ランクがそれ自体として競争の報酬になり意味の根拠となってしまうのが受験システムの自律化／自己準拠化であると説明している(竹内 1995: 90-91)。

ここで竹内は、偏差値 52 と偏差値 55 の僅差の学校ランクが将来の地位達成(学歴社会Ⅰ)に持ち越されるわけではないということを指摘すると同時に、僅差の学校ランクがまなざしとしての学歴(学歴社会Ⅱ)にもちこされるわけではないということも指摘している。それにもかかわらず、偏差値やわずかな学校ランクは受験競争の誘因となる。そこで、自己準拠化した受験社会が立ちあがる学歴の象徴的価値にも目配りする必要性を説く。竹内は、学歴社会Ⅱにおける学歴の象徴的価値と受験社会が立ちあがる学歴の象徴的価値を区別してそれぞれを象徴的価値Ⅰと象徴的価値Ⅱとよんだ。

竹内によれば、日本の受験競争の過熱は、学歴の機能的価値(学歴社会Ⅰ)と学歴の象徴的価値Ⅰ(学歴社会Ⅱ)、象徴的価値Ⅱ(受験社会)によって成立しているという。

竹内は受験社会に晒された受験生の生活世界のリアリティは学歴収益率以上に学校ランクそのものにおかれるとしている。

それでは、受験システムの自律化／自己準拠化による受験競争過熱の説明とはいかなるものか。

竹内によれば、日本の教育的選抜の特徴は、細かな学校ランクによる傾斜的選抜システムにあるという。

傾斜的選抜システム社会においては合格可能性を知るための模擬試験などが日常化し、事前選抜(pre-selection)が制度化しているから、選抜以前にアスピ

レーションが冷却されるという(竹内 1995: 96)。

しかし、事前選抜の制度化を冷却とだけ結びつけることはできないとする。それは、生徒が模擬試験などによって偏差値 55 と知らされたとき偏差値 68 とされる学校への志願は諦めるが、頑張れば偏差値 60 の学校に進学できるのではないかと、というように却って煽られるということに着目したことによる。たとえば、今の偏差値からすれば C 校くらいといわれても、もう少し頑張れば B 校に進学できる、あるいは今の偏差値では I 校といわれてももう少し頑張れば、H 校や G 校に進学できるかもしれないという具合に焚きつけられるというのである。こうした焚きつけの作用が、偏差値上位者のみでなく中位者や下位者についても同様におこることに竹内は注目する。受験生は、偏差値をみて、冷却されるのではなく、志望を縮小されるという鎮静のあとに自分なりの目標にむけて再び焚きつけられると説明した。構造的には、傾斜式選抜システム＝偏差値受験社会は諦めをもたらずのではなく、諦めを迂回しながらの焚きつけのテクノロジーを潜めていると述べている(竹内 1995: 96-97)。

つまるところ、「傾斜式選抜システムという選抜システムの特徴こそ大衆の受験競争を加熱する背後の仕掛け」(竹内 1995: 110)となる。傾斜式選抜システムが、多くの中学生に分相応のアスピレーションを維持させ、成績上位、成績中位、成績下位のいずれの成績カテゴリーにおいても受験生の競争意欲を強め、ひいては受験競争が過熱するのである。

3. 受験競争論における受験生像

3-1. 社会的類型としての受験生

傾斜式選抜システム下ある受験生を、竹内は、受験準備学生とみなし、「生活を律し一心不乱に勉強することなどの自己監視の特有な生活規範を含んだ社会的類型としての受験生」とし(竹内 1995: 113)、ミシェル・フーコーの議論に依拠して説明している(竹内 1995)。

竹内によれば、傾斜式選抜システムという選抜システムにおかれた受験生は、フーコーの言う規律訓練権力に晒された主体化＝服従化のモデルそのものになるという(竹内 1995: 110)。規律訓練権力とは、あらゆる人に対して、何ものであり、何ができ、何に配置したらよいのかを知ろうとするまなざしの作用のことで、身体や感情を自発的に制御させてしまうつつましいが疑い深い権力であり、毛細血管のように偏在し、

日常的な社会実践を通じて作用する権力だとしている。この規律訓練権力は、絶え間ない監視作用を促すために時空間を組織化する実践や技術からなっているという（竹内 1995： 111）。竹内は、この規律訓練権力というまなざしの作用の論理を、日本の受験生を説明するのに応用する。

受験生にとって、「こんな点数じゃ、C 高はムリ。E 高どまり」といわれるような、日常的なテストの微妙な点数差は、傾斜式選抜システムのなかで将来の進学高校や進学大学との対応を予測させると竹内はいう。それだけに試験のわずかな点数差、すなわち傾斜的選抜システムのまなざしによって、リアリティと重圧感をもたらすというのである（竹内 1995）。

日本の受験生が晒される傾斜的選抜のまなざしは、フーコーの言ったパノプティコンのまなざしであると竹内はいう。このパノプティコン下の主体＝隷属の制度こそが、日本における受験生という制度であるとした（竹内 1995： 112）。

日本における受験生という制度は、「受験生のくせに」「受験生なのに」「受験生だから」という言葉に反映される。竹内によれば、「受験生のくせに」「受験生なのに」「受験生だから」という言葉は、制度としての受験生の存在と受験生への社会化過程をなによりも証明しているという（竹内 1995： 113）。「受験社会は、『受験生化』の自己監視のモデルを誕生させ」（竹内 1995： 113）、受験生は、生活を律し一心不乱に勉強するという自己監視の生活規範に従う（竹内 1995）。日本の受験システムは傾斜式選抜構造によって受験生という自己監視モデルを構築しているために、受験生は制度としての受験生からの強い圧力に苦しめられるのである（竹内 1995： 115）。

3-2. 受験生の進路選択意識

傾斜式選抜システム下、すなわち「受験競争」下にある中学生の進路選択意識の説明は、竹内の「事前選抜」（竹内 1995）耳塚のいう成績の「自己評価」（耳塚 1986）、荻谷の「自己選抜」（荻谷 1986）に詳しい。これらの研究者に共通する受験生の進路選択意識の説明は、日常化した「事前選抜」「自己評価」「自己選抜」に規定されるとしたことである。

事前選抜については先述のとおりであるが、学校ランクの細かさから、模擬試験などでとった自分の成績・偏差値からほど遠いランクの高校への進学は諦めるが、その反面、僅差ではあるが、より高い偏差値の高校の進学へ向けて努力しようというものであった。

耳塚のいう成績の「自己評価」とは、中学生の進路選択プロセスにおいて、彼らの進路を規定するとされる要因の一つである（耳塚 1986）。耳塚はその議論において、「中学校における生徒の選抜・分化からもっぱら『学業成績』を基準として進行し、それは、生徒集団内部での成績ヒエラルヒーの中に自らを位置づけ、そこでの地位を敏感に反映した進路意識を形成するという主観的な過程として進行している」（耳塚 1986： 16）と結論付けている。また、荻谷は、学業成績が、高校入学以前に生徒の意識の中で教育達成および社会的地位達成の可能性を大きく制約するとした。一元的に示した学業達成を選抜基準とすることで、将来の教育達成の可能性が見通しのきくものとなるとし、そうした単純で理解しやすい基準が現実の選抜に用いられる以上、生徒はそれに従って将来の教育期待を形成すると指摘した。荻谷は、こうした現象を、生徒の「自己選抜（self-selection）」とよんだ（荻谷 1986）。耳塚や荻谷は、その説明を生徒に限った点で、教師の関与をもクローズアップさせた竹内の「事前選抜」とは異なるが、学業成績という一元的説明によって受験生の進路意識を説明している点で共通している。

4. 「受験競争論」の再検討

4-1. 議論の前提

調査時点での 2000 年には偏差値はすでに廃止され、調査対象者たちは自分の偏差値を知ることはできなかった。余談であるが、質問紙調査で偏差値という単語を明記していることに、中学生は「偏差値ってなに？」などと逆に質問紙に書いていた。

それでは、自らの偏差値を知りえない中学生は、学校ランクをどれほど把握しているだろうか。

表 1 は「各高校のだいたいの順位を知っていますか？」という問いに対する回答である。中学三年生でさえも、2000 年 10 月の時点で、半数近くが高校ランクを「知らない」としている。その理由は「聞いたこ

表 1 各高校のだいたいの順位は知っていますか？（％）

	中学 2 年生	中学 3 年生
知っている	40.0	55.6
知らない	57.1	44.4
無 回 答	2.9	0.0
計	100.0	100.0

表2 高校ランクを知っている理由と知らない理由

知っている理由	知らない理由
<ul style="list-style-type: none"> ・塾で教えてもらった ・お姉ちゃん／お兄ちゃん／お母さん／親が教えてくれた ・人から聞いた ・学校では言わないが塾で教えてもらう ・塾で冊子／資料をもらったから 	<ul style="list-style-type: none"> ・きいたことがない ・興味がないから ・知る方法がない

とがないから」「興味がないから」「知る方法がないから」である。「知っている」と回答した者は、高校ランクを塾や親、兄や姉、周囲の人から聞いたり、塾で冊子をもったりしている。特に注目すべきは「学校では言わないが、塾で教えてもらう」という回答である。

「学校では言わない」ということに関して、中学校側としては、4月から12月までは「校風とか部活とか、自分に合った高校を選べ」（中学教師）という指導をしている。この間、中学校側は、選抜制度の内容を情報として公開することもなければ、高校ランクを公開することもない。最終的には単独選抜制度下では輪切り指導となる。最終的には輪切り指導となることに対し、中学教師としては「制度がかわらんことには、しゃあない」（中学教師）のである。

このように、対象となった中学生は、偏差値はおろか、最後まで高校ランクを把握しないまま受験に臨むことになる。このことは、高校ランクを把握しているという前提でなければ展開できなかった先行研究の議論とは前提が大きく異なる。すでに述べたが、「自己選抜」（荻谷 1986）や、「自己評価」（耳塚 1986）、「事前選抜」（竹内 1995）という言葉が先行研究では使われている。自己の成績によって自らをヒエラルヒーの中に位置付け、また「成績」によって「自ら進路選択する」ということであったのだが、「事前選抜」をはじめ「自己選抜」「自己評価」についても、中学生が自らの偏差値を把握し、高校ランクを把握していることを前提としなければ成り立たない議論である。

まずは、「すべての中学生が高校ランクを把握できているわけではない」というところから議論を出発させる必要があるだろう。

4-2. 意識調査の限界

受験生の意識に関する先行研究は、予め受験や勉強だけを焦点化した上での調査であるという限界を持っており、受験競争論の描く悲観的な受験生像を再確認するにとどまるものが多かった。

主観主義社会学的方法で中学生の受験や勉強に対する意識を捉えようとした橋爪は、中学生に「受験や勉強」をテーマに手記を書かせ、その手記を分析し中学生の受験観や勉強観を読み取れるようにしていた（橋爪 1985）。当然のことながら中学生は「受験や勉強」についてのみを考え、「受験や勉強」についてのみを述べることになる。

深谷は、「3年生を受け持っている担任などの話を聞くと、中3の二学期後半になっても、のんびりとしている生徒が多く、受験に特有な張りつめた雰囲気はみられないという」（深谷 2002: 38）としながら、「高校入試についての気持ちを聞いて」いる。なぜ日常を捉える中三担任の意見を聞きながら、担任の話す受験前の日常を考慮して受験生の意識を調査しなかったのだろうか。深谷は、担任のことばに反して、受験に対するプレッシャーは昔と変わらず存在するという調査結果を残している（深谷 2002）。

これらの先行研究は、中学生の受験や勉強、進路に関する意識調査に際して、「日常世界における」中学生の意識を捉えようとはしなかった。

中学生の受験や進路に関する意識を問おうとした調査は多くあるが、共通することは、当事者の日常的実践の中で捉えようとしたものではないということである。日常世界を構成する様々な要素の網の目のうちから、進路選択過程という一要素のみを選択し、しかもその過程にある中学生の進路意識のみにスポットを当てていた。中学生の日常世界における意識レベルでの勉強の領域の部分のみを目覚めさせている状態にした、つまり彼らの意識の勉強の領域のみに焦点を当てるという方法であった。

対象者に勉強や受験などの限定した要素のみを意識させた上での調査だけでは、彼らが自身の日常生活世界の中でそれらをどのように意味付けているのかということが見えてこない。また、彼らの日常生活世界の内部にスポットを当てなければ、彼らの発することばの含意が読み取れない。たとえば、ある中学生が「大学へ進学したい」答えれば、多くの調査では即座に「学歴志向」と結びつけられるわけだが、私の調査では、「大学へ進学したい」とする者でも「なんとなく」「楽しそうだから」「みんな行くから」などの理由を述べる者もいたし、大学についても「分からない」「一人一人勝手ではなく大人っぽくてしっかりしていて華のあるところ」「勉強をある程度してあとは遊ぶところ」「自由でのびのびしたところ」「先生がマイクをもって説明しているところ」「授業が少なくいつでも大

学をぬけだせる」「楽しい」「大人の世界」などといった認識であった。

同じ意識調査といっても焦点の当て方や調査の仕方によって得られる結果は違うのである。

4-3. 受験と勉強の連続性

先行研究は、中学生の営む日々の勉強と受験との間に連続性を認めている。たとえば、竹内をはじめ、耳塚や荻谷は、事前選抜、または成績の自己評価や自己選抜の過程が、「日常的」なものであるとみなしている。こうした議論からは、中学生の意識レベルにおいて、日常的に行われるテストと受験とを連続性のあるものとして扱っているということが読み取れる。

少なくともインタビューの対象者6人の勉強観は受験を自覚しないものであった。彼らは、受験勉強期間に入るまでは、試験前の勉強期間とその他の非勉強期間を繰り返すのであるが、ここでは、校内テストというその場をしのぐためだけの場当たりの勉強をする。つまり彼らは勉強を入試に向けて継続的に蓄積しなかったのである。同様のことは受験勉強についても言える。受験校を決定する最終面談後、入試に向けての受験勉強をする。受験勉強期間に入るのである。受験勉強期間における受験勉強は、入試という場をしのぐためだけに営まれる場当たりの勉強にすぎなかったのである。

先行研究は、中学生が日常的に、勉強を受験へ向けて累積させていくものと捉え、その中学生の日常をことに悲壮なものとして理解していた。たとえば橋爪は、受験体制を学歴社会とよび、その影響範囲が、中学生のほとんどすべての生活面にわたり、さらに彼らの精神・心理面にも食い込んでいると指摘している(橋爪1985: 119)。橋爪は、中学生のこうした精神・心理面をマイナスイメージを駆使した表現で記している。竹内は、フーコーの論に拠って、受験生という制度に晒された受験生像を次のように述べる。「こんな点数じゃ、C高校はムリ。E高校どまり」といわれるような、日常的なテストの微妙な点数差による事前選抜は、傾斜式選抜システムの中で、将来の進学高校や進学大学との対応を予測させるために、試験のわずかな点数がリアリティと重圧感を増加させる(竹内1995: 112)。

インフォーマントである6人は、非勉強期間はもちろんのこと、勉強期間や受験勉強期間においても、自身の楽しみを勉強の犠牲にはしなかった。日々の勉強は受験のために累積させず、彼らの日常における実践

レベルにおいても意識レベルにおいても、受験や勉強が多くを占めないものであった。

中学生の日常世界は、受験や勉強によって構造化されているとはかぎらず、必ずしもストレスの伴う、重圧的で、不安や焦りばかりの過程とは見なしえないのではなかろうか。

4-4. 進路選択基準

中学生の進路選択意識は、学業成績のみに規定されるのであろうか。中学生の進路選択意識は、学業成績という一元的説明のもとで捉えられるものののだろうか。

少なくとも6人の対象者の進路選択意識は学業成績だけに規定されなかった。彼らには自身の持つ進路選択基準があったからだ。彼らの進路選択基準は、自身が高校から見出すインセンティブである。たとえば、その高校へ進学すれば留学制度を利用して留学が体験できるとか、あこがれの制服が着られるとか、高校が繁華街にあることから遊びながら高校生活を満喫できるとかいったことである。彼らにとって、自分が見出すインセンティブには価値がある。結局、彼らは高校ランクとは関係のない意味付けをしていることになる。

このように、対象者6人の進路選択は、学業成績だけに依拠するものではなかった。彼らの進路選択の仕方を見ていると、学歴社会的価値を内面化しているとは言い難い。

先行研究は、中学生の進路意識を説明するときに、必ず「学業成績」が説明要因となっていた。中学生の進路選択意識は、「自己の成績による自己選抜」によるものであるという一元的要素でのみ説明されてきたのである。受験競争論内で中学生の進路選択意識を説明した竹内でさえ、「自己の成績による事前選抜」という一元的説明に終わっている。

また、本研究においては、先行研究は捉えてこなかった、親と教師の一部連携による進路選択意識構築の側面もみられたのだが、この観点も中学生の進路選択意識プロセスを捉える際、考慮に入れる必要があるだろう。

4-4. 受験生の日常的実践

受験競争の激化・普遍化を「傾斜式選抜」のメカニズムによって説明した竹内は、さらに傾斜式選抜システム下に置かれる受験生はフーコー的なパノプティコン型のまなざしに晒され、勉強に専念すべく生活を律

していくという規範を内面化し、自己監視的・自己規律的な主体へと形成されていくと論じた(竹内 1995: 110-115)。しかし本稿のケースはいずれも、こうした受験生像には当てはまらない。とはいっても、彼らは受験競争からの離脱者、いわゆる「落ちこぼれ」というわけでもない。進学を目指しているかぎりにおいて受験競争に巻き込まれているのだが、その勉強も生活も受験に向かって構造化されているとはいえない。「自己監視」「自己規律」の要素も薄弱で、勉強や受験のために各人の日常の楽しみが大きく犠牲にされるようなことはない。

竹内がフーコーの議論に依拠しているのに対し、本稿のケースに示されているような受験生の姿、いわば受験体制を場当たりのにすり抜けていく受験生の姿は、日常実践の多様性という観点からフーコーを批判したミッシェル・ド・セルトーの議論によって捉えることができよう。彼らの日常実践は、セルトーの言えは、「一望監視的な仕掛けがそこで作動できるようなある固有の場を備えていない手続き」(セルトー 1987: 124)であり、「一望監視装置にさづけられた、一神教にも似た特権のもと、あちこちに散在するさまざまな実践の『多神教』」(セルトー 1987: 122)である。こうした多様な実践の手続きをセルトーは「戦略」と区別して「戦術」と呼んだ(セルトー 1987: 124)。

セルトーのいう「戦術」とは、「これといってなにか自分に固有のものがあるわけでもなく、したがって相手の全体を見おさめ、自分と区別できるような境界線があるわけでもないのに、計算をはかることである」(セルトー 1987: 26)。体系性も一貫性もなく、なにかうまいものがあれば「すかさず拾おう」とするのが「戦術」である。いい機会だと思えば、さっそくそこで、さまざまに異なる要素をいろんな風に組み合わせる。多くの日常実践、大部分の「もののやりかた」は戦術的である。たとえば、「強者」を相手に「弱者」が成功をおさめるのも、うまい手を使うのも、離れ業をやったのけるのも、臨機応変のかけひきなどもそうである。こうした戦術は、連綿とたえることなく、不易のすがたをみせているとセルトーはいう(セルトー 1987: 26-27)。

セルトーによれば、一社会のもろもろの働きは、あるひとつに支配的なタイプの手続きに還元しつくせるものではない(セルトー 1987: 121)。つまり「ひとつの社会は、その社会の規範的諸制度を組織化するような、他にぬきんでた幾つかの実践によって構成さ

れ、そしてまたこれとは別の無数のマイナーな実践によって構成されているのであって、そうしたマイナーな実践は、たとえディスクリールを組織化しなくても、たえずそこに存在しつづけ、この社会からみてもまた別の社会からみても異質な、なにかの萌芽や、仮説の余地を保ちつづけている」(セルトー 1987: 121-122)。私の調査対象者であった6人の実践も、セルトーの言う、「別の無数のマイナーな実践」のうちの一つと考えることができよう。

5. 受験競争論の知識社会学

私のデータが示すように、受験競争論ではカバーできない側面を受験生が持つにもかかわらず、なぜ受験競争論は人々に受け入れられるのか。これは知識社会学的に検討されるべき問題である。

受験競争論においては、「受験生」は「生活を律し一心不乱に勉強する」という「自己監視の特有な生活規範」を含む「社会的類型」として捉えられる。「生活を律し一心不乱に勉強する」ことなしに「受験競争」を生き残れないというような受験競争観が広がっている。

こうした受験生の捉え方は、受験生を我が子に持つ親の言動にも表れている。受験生の親は、我が子の日常生活を受験に拘束しようとする。夏休みのたった一日の旅行さえも「受験生だから」やめておくよう制限したり、「『受験生なのに』何を考えているのか」と遊びに出かけたりすることを許さない。「受験生のくせに」「受験生なのに」「受験生だから」という言葉は、「制度としての受験生」の存在を象徴することばとして捉えられる(竹内 1995: 113)。また、生活を律し一心不乱に勉強することこそ受験競争を生き残る手段だと見る受験競争論は、すでに私たちの「日常的知識」ともなっている。バーガーとルックマンの言葉を借りれば、「人々がその日常生活で〈現実〉として〈知っている〉ところのもの」が「日常的知識」であり、そういう「常識的な〈知識〉こそが知識社会学にとっての中心的な焦点にならなければならない」(バーガー／ルックマン 1967=77: 24)。

「日常的知識」と化した受験競争論のステレオタイプ化した受験生像には、「生活を律し一心不乱に勉強」しない受験生は欠落してしまった。このような受験への常識的な認識枠組みは、どのように成立しているのだろうか。

バーガーとルックマンは、「いかなる〈知識〉であ

れ、それが〈現実〉として社会的に確立されるにいたる過程」を問題にすることが知識社会学の重要な課題であると言った。「人間の〈知識〉が社会状況の中で発達し、伝達され、維持されていく」過程を「自明視された〈現実〉がどのように普通の人間にとって凝結していくのか、という観点から」理解するのである（バーガー／ルックマン 1967＝77：5）。以下では、そのような意味での知識社会学の視点から受験競争論を検討する。

竹内の受験競争論は、学歴社会Ⅰ論（学歴の機能的価値）と学歴社会Ⅱ論（学歴の象徴的価値Ⅰ）、受験社会論（学歴の象徴的価値Ⅱ）によって成り立っているのだが、受験競争論の説明する現象は、私の調査データでも見られた。たとえば、受験生を子に持つ親が、我が子の将来のためだと、学歴の価値でもって子どもの進学先を決めたり、遊びに行くのを咎めて将来のために今日の勉強をさせようとするといったことである。

近代合理主義が個人の自律を前提としているというのであれば、親は近代合理主義の信奉者であろう。親のような禁欲倫理—将来の成果のために今を我慢する—に拘束されることなく、子どもは今を楽しむことに価値をおく。そのため受験競争論は、我が子をコントロールせねばならない親に受け入れられやすい。たとえば、受験生の親は、竹内のいうように「受験生のくせに」「受験生なのに」「受験生だから」（竹内 1995：113）と我が子の日常生活を受験生活として拘束する。夏休みのたった一日の旅行さえも「受験生だから」やめておくよう制限したり、「受験生なのに」と遊びに出かけたりすることを許さない。

親の「我が子の将来のため」という思いは、受験社会論の学歴の機能的価値、象徴的価値を受容している証である。たとえば、親は「我が子の将来のため」に、進路の選択基準に学歴の価値観を用いる。あやかの母親などが、「もっと目標を上にもって。やる前にあきらめたらだめ」と、我が子によりランクの高い高校を目指させようとする。少しでもランクの高い高校へ進学させることが「この子の将来のため」になるとの思いからである。また、れいなやせいこの母親は、我が子の「将来を思って」、高校から専門分野を学ばせずに普通科へ進学させようとした。親が「我が子の将来のため」を思って、専門学科よりも普通科を、よりランクの高い高校を狙わせようとするのは、受験競争論に従って学歴の機能的価値を重視しているからだと思われる。

しかし、日本では学歴の社会的規定力はかなり小さいと言われている（竹内 1995：86）。少しでもランクの高い高校へ進学することに比例して、将来の社会的地位や経済的地位が必ずしも高くなるとは限らないということは、親も分かっているだろう。だが、学歴による社会的経済的地位規定力が小さいというのであれば、さほど成績の良くない我が子が、社会的地位や経済的地位の高いところに行き着くチャンスがある、行き着いてほしい、と考えるのも親であろう。「（普通科の少しでもランクの高い高校へ）行ってくれたら何とかなる」ということばにも、「（普通科ではなく専門学科へ進むというように）選択肢をせばめてほしくない」ということばにも、親の我が子に対する社会経済的地位の達成への思いが表れている。我が子の成功を祈る親に、受験競争論は受け入れられやすいのである。

一方、学歴の受験競争論の象徴的価値という側面は、たとえば、たけしの母親の言った「（滑り止めの私立高校を不合格になったとしたら）ここらへん歩けんようになる。引っ越さなあかん」とのことばに端的に表れていると思う。なぜなら、もし、滑り止めの高校としてのレッテルを貼られている高校すら不合格となったならば、我が子は「人々の『まなざし』のなかで、『人間としての基本的価値が高い』（竹内 1995：89）とみなされないからだ。「我が子の将来のため」という親の思いは、竹内の受験競争論が強調する象徴的価値という側面とも合致する。

教師たちは、「ほんまは、校風とか部活とかで決めてほしいんやけどなあ」と、中学生が実際に進路選択のときに感じる思いを個人的に代弁するようなことを言っても、学校組織の中にいる以上、「制度が変わらんことにはしゃあない」と、輪切り指導を行う。輪切り指導は、不合格者を出さないように、生徒を成績ヒエラルヒーの層へ振り分ける作業である。教師の個人的思いがどうであれ、輪切り指導そのものが受験競争論に迎合している。輪切り指導しかできない教師も、受験競争論、細かく言えば受験競争論のうちの学歴社会Ⅰ論の文脈からは逸脱できない。その意味で、実質的に受験競争の論理を支えることになる。

また、教師は己の権威を利用し、生徒を輪切り指導して彼らの進路を強制することで自らの象徴的価値を維持する。仕事であると言いながら、自らの権威を保守する教師は結局のところ受験競争論、厳密には受験競争論のうちの学歴社会Ⅱ論の文脈に収まる。

受験競争論という日常的知識は、メディアに報じら

れる高学歴者のイメージにも反映されている。たとえば、犯罪者や被害者が高学歴であれば必ず「東大卒」などと報道される。対象が少年であったならば、好成績が報じられる。近頃起きた小学六年女児殺害事件では、被害女児の方が加害女児より成績が良かったと報じられた。メディアは事件や事故の当事者が高学歴であるというだけで大衆の受けがよいので報じるのだと思う。ノンエリートを自覚する大衆が、学歴エリートの不幸を面白がることに目をつけているからだろう。

テレビのワイドショーでは、「なぜ高い学歴を持った人がこんな事件を起こすのか」ということが話題にされたりする。高学歴者が犯罪者であれば、大衆は「高学歴者のすることは理解できぬ」と高学歴者が犯罪者となることを面白がり、高学歴者を社会的に異常とみなすことで、高学歴でない自分たちが社会的に正常であると認識し、高学歴者を大衆が見下す。反対に、大衆は、高学歴者の属する世界への畏敬の念を含んだ特別視をもする。それは、学歴エリートともなればそんな愚かなことはしないだろうといった言葉に表れる。有名進学校へ通う女子高生と定時制高校中退の少年が犯したタクシー運転手殺害事件があったが、女子高生には「あんな頭のいい子がなんで」「お父さんもお母さんもえらいのに」という反応があり、少年に対して同様の反応はなかった。反対に、少年を「定時制高校を中退」と報道することで、「定時制を退学する少年なら犯しうる」とのメッセージが読み取れるようにする。高学歴者に対するメディアの報道姿勢と、一般大衆の報道への反応は、梶田のいう「貴種」としての高学歴者イメージに合致している。学歴の象徴的価値という側面をもつ受験社会論はメディアと一般大衆に擁護される。

事件や事故の被害者が高学歴者であったなら、「高学歴だったのにその将来がもったいない」と、被害者が高学歴者でない者よりも、その不幸を残念がられる。たとえば、地下鉄日比谷線事故でなくなった一人の男子高校生が東大をめざす優等生であったことから、テレビの報道番組では、東大へ進学しエリートとしての将来があったであろうとの思いで男子高校生の死を惜しむ声を伝えていた。同じ事故でなくなった被害者よりも、東大志望だった男子高校生の死の方が惜しまれていたというのが私の印象だ。被害者が高学歴者であれば、その高学歴者の将来がすばらしいものになったろうにと惜しむのは、竹内の受験競争論の機能的価値に支配された意識のあらわれであろう。高学歴者が被害者となることに対する大衆の反応は、受験競

争論を支えていることの証となる。

こうして、学歴の機能的価値や象徴的価値が支持され、受験競争論は人々の日常知として伝達され、維持されていくのである。

すでに見たように、竹内は受験競争論の一つの特徴として、日本には「受験生という制度」が存在するという(竹内 1995)。それは「生活を律し一心不乱に勉強することなどの自己監視の特有な生活規範を含んだ社会的類型」である。「受験社会」では試験の「微細な点数の差異が監視のまなざし」となり、「傾斜的選抜システムの中で将来の進学高校や進学大学との対応を予測させる」ために、「試験のわずかな点数がリアリティと重圧感をます」ことになる。そうして「受験社会に晒された受験生の生活世界のリアリティは学歴収益率以上に学校ランクそのものにおかれる」(竹内 1995: 93)。

竹内の捉える、「制度としての受験生」とは、受験生のステレオタイプ化である。高学歴者がステレオタイプ化された受験生のイメージを持ち続けるのは、偏差値・学業成績という一元的尺度による競争の頂点にある者としてのステレオタイプに高学歴者自身が固執するためではないだろうか。リップマンはステレオタイプについて、「われわれの自尊心を保障するものであり、自分自身の価値、地位、権利についてわれわれがどう感じているかを現実の世界に投射したものである。したがってステレオタイプには、ステレオタイプに付属するさまざまな感情がいっばいにこめられている。それはわれわれの伝統を守る砦であり、われわれはその防御のかけにあってこそ、自分の占めている地位にあって安泰であるという感じをもち続けることができる」と説明する(リップマン 1987: 131-132)。受験生のステレオタイプは高学歴者の「自尊心を保障」し、彼らの現在の地位が、「安泰であるという感じ」をもたらす。つまり、受験競争論は、高学歴者にとって、受験競争を勝ち抜くことによって獲得した現在の自分の価値や地位や権利を正当化する機能を果たすのである。

日本では近代化の開始と同時に学校教育が開始された。近代化が進むにつれ、近代的職業は「学校出」(藤田 1997: 176)によって占められるようになる。さらには、「戦間期から戦後の高度経済成長期にかけて、近代セクター⁶⁾と学校教育が並行して拡大・発展する過程で、両者⁷⁾の結びつきはその裾野を広げ、学歴主義は社会のすみずみまで浸透する」(藤田 1997: 176)。密接にリンクする近代化と学歴主義は、親や教

師、学歴エリートや大衆の間に受験競争論を浸透させ、それを日常的知識として「凝結」させ、社会的な「知識の在庫」(バーガー／ルックマン 1967=77)に組み入れていく。すでに見たように、親、教師、高学歴エリート層、大衆、そしてメディアは、それぞれの理由で受験競争論を受け入れ、多かれ少なかれそれをサポートしているのであるが、その根底にある共通基盤は「近代主義」の価値観であろう。近代社会では、家柄や身分のような「属性」ではなく、個々人の「能力」こそが社会的上昇のための資源とされ、競争の中でその能力を発揮していくための勤勉な努力、そして将来のために今を我慢する「現実原則」や合理的配慮が重視される。受験競争論はこうした近代の価値観・世界観に深く根ざしており、そこにこの議論のイデオロギー性をみることもできる。

再びリップマンの言い方を借りれば、「われわれはたいていの場合」、受験競争を「見てから定義しないで、定義してから見る。外界の大きくて、盛んで、騒がしい混沌状態の中から、すでにわれわれの文化がわれわれのために定義してくれているものを拾い上げる。そしてこうして拾い上げたものを、われわれの文化によってステレオタイプ化された形のままで知覚して」(リップマン 1987: 111)、受験という現象の中に自ら定義したもの、「受験競争」、を発見したのである。だが、この「受験競争」は、現実の受験生の日常生活のどれほどを反映しているのだろうか。

注

- 1) 調査については、『進路選択プロセスにおける中学生の意識構造』(森永:2004)を参照。
- 2) 6人という限られたインフォーマントを用いて議論を展開するわけだが、対象自体を研究しているだけではないし、また対象者から得た結果を強いて一般化しようとするのでもない。対象を「通して」(佐藤 1992: 99)、一般的に受験競争として認められている問題について考えようとするのである。
- 3) 6名には毎週一回個別に会い、一時間から一時間半程度インタビューを行っている。彼らはすべて、H県H学区のそれぞれ別の公立中学に通う生徒である。
- 4) ローゼンバウムの理論である能力の社会的構成説(竹内 1992: 47)に依拠したもの。
- 5) 進学者が、進路変更や自由選択の可能な、普通教育をめざすことから、中等学校では普通教育コースが発展した。また高度の専門教育を与える高等教育機関においても同様の傾向が見られた。特定の職業を志向する「専門型」と区別し、将来の職業やキャリアについての志望があいまいな学生は「教養型」とした。日本では、「教養型」学生は、法・経・商・文等の文科系学

部に集まる。これらの学部は、本来は高度の専門教育を目的としているが「教養型」学生の増加がそれらを「教養学部」にかえてしまったとしている(天野 1984: 122)。

- 6) 医者、法律家、教員などの専門職、近代国家の行政、軍事組織の担い手である官僚・軍人、及び銀行や財閥系大企業の職員層(藤田 1997)
- 7) 近代学校教育と近代的職業

参考・引用文献

- 天野郁夫, 1984, 『「学習社会」への挑戦』日本経済新聞社。
- 天野郁夫, 1996, 『日本の教育システム—構造と変動—』東京大学出版会。
- 伊丹敬之・加護野忠男, 1989, 『ゼミナール経営学入門』日本経済新聞社。
- 上野千鶴子, 2002, 『サヨナラ学校化社会』太郎次郎社。
- 梶井篤志, 2002, 『戦略的思考の技術』中央公論社。
- 梶田毅一, 1983, 「学歴社会の一つの課題」『教育社会学研究』第38集。
- 門脇厚司・飯沼浩之, 1992, 『高等学校の社会史—新制高校の〈予期せぬ帰結〉』東信堂。
- 荻谷剛彦, 1986, 「閉ざされた将来像—教育選抜の可能性と中学生の『自己選抜』」『教育社会学研究』第41集。
- 荻谷剛彦, 2000, 「学習時間の研究—努力の不平等とメリトクラシー」『教育社会学研究』第66集。
- 坂下昭宣, 1985, 『組織行動論』白桃書房。
- 佐藤郁哉, 1992, 『フィールドワーク』新曜社。
- 高橋 潔・金井壽宏, 2002, 「モチベーション論のミッシング・リンク」『一橋ビジネスレビュー 2002 年 SUM.』。
- 竹内 洋, 1981, 『競争の社会学—学歴と昇進—』世界思想社。
- 竹内 洋, 1981, 「教育アスピレーションと学歴社会の構造」『価値意識の社会学的研究』関西大学経済・政治研究叢書第45冊。
- 竹内 洋, 1988, 『選抜社会 試験・昇進をめぐる〈加熱〉と〈冷却〉』メディアファクトリー。
- 竹内 洋, 1992, 「教育と選抜」柴野昌山, 菊池城司, 竹内洋編『教育社会学』有斐閣。
- 竹内 洋, 1994, 「学歴社会論再考—伝統的アプローチと制度論的アプローチ」『現代社会学研究』第7巻。
- 竹内 洋, 1995, 『日本のメリトクラシー 構造と心性』東京大学出版会。
- 竹内 洋, 1997, 『立身出世主義—近代日本のロマンと欲望—』日本放送出版協会。
- 田中孝彦・高垣忠一郎, 1999, 『中学生をわかりたい』大月書店。
- 橋爪貞雄, 1976, 『学歴偏重とその功罪』第一法規。
- 橋爪貞雄, 1983, 『学歴社会からの脱却』黎明書房。
- 橋爪貞雄, 1985, 「受験体制に関する中学生の意識—主観主義社会学的試み—」『名城大学教職課程部紀要』第18巻。
- 久富義之, 1993, 『競争の教育 なぜ受験競争はかくも激

- 化するのか』労働旬報社。
- 久富義之・高口明久, 1993, 「今日の学力競争の社会的土台—競争の秩序化・二重性, そして相対化—」『教育』1月号 No. 557 国土社。
- 深谷昌志, 2002, 「高校進学 of 現在～1988年との対比～」『モノグラフ・中学生の世界 VOL 72』ベネッセ教育総研。
- 藤田武志, 1994, 「中学生の進路決定過程に関する事例研究」『東京大学教育学部紀要』第34巻。
- 藤田武志, 1996, 「選抜システムと中学生の競争意識」『東京大学教育学部紀要』第36巻。
- 藤田英典, 1997, 「学歴主義の社会学」天野郁夫編『教育への問い』東京大学出版会。
- 耳塚寛明, 1986, 「中学校における教育選抜過程—成績の自己評価と進路展望に関する追跡的研究—」『国立教育研究所研究収録』第13巻。
- 宮台真司, 2000, 『まぼろしの郊外』朝日文庫。
- Berger, Peter L. and Thomas, Luckmann, 1967, *The Social Construction of Reality-A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York: Anchor Books Edition.
(=1977, 山口節郎訳, 『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法』新曜社。)
- Kohn, Alfie, 1986, *No Contest: The Case Against Competition*, New York: Houghton Mifflin Company.
(=1994, 山本 啓・真水康樹訳, 『競争社会をこえて』法政大学出版局。)
- Certeau, Michel de, 1980, *Arts de faire*, Paris: Union Générale d'Éditions.
(=1987, 山田登世子訳, 『日常実践のポイエティック』国文社。)
- Thurow, Lester C, 1972, "Education and Economic Equality," *The Public Interest* 28 (Summer 1972): 66-81.
(=1980, 潮木・天野・藤田訳, 「教育と経済的平等」カラベル・ハルゼーヘン編『教育と社会変動』(下), 東京大学出版会。)
- Lippmann, Walter, 1922, *Public Opinion*, London: George Allen & Unwin, Ltd.
(=1987, 掛川トミ子訳, 『世論 (上)』岩波文庫。)